

註校男乙井藤

近松世話全集

卷 中



房 山 富

註校男乙井藤

近松世話物全集

中 卷



富 山 房

昭和十七年四月五日 初版発行
昭和四十七年十一月十日 七版発行

近松世話物全集 中巻

定価 八五〇円

著 者 藤 井 乙 男

発 行 者 坂 本 起 一

印 刷 者 東京都千代田区飯田橋二ノ十四ノ一
文 弘 社

発 行 所 富 山 房

東京都千代田区神田神保町一ノ三
電話 (二九一) 二一七一〜七
振替 東京 五四五二九

例言

例

本書は一切原本通りの複製で、誤字・當字・假名違ひも訂正を加へず、節付も俗にいはゆる胡麻點以外は、すべて保存し、謡曲・舞曲・半太夫・文彌・説經・間の山・地・詞・色・ハル・ノル・ウ(ク)等は勿論、句點も皆そのまゝである。たゞ一般讀者の読み易きやうに、假名書きの左傍に漢字をあて、懸詞は括弧を施して、その意味を會得せしめるやうにした。

送り假名も概して不足がちで、「見捨て」は「見捨テテ」、「聲立て」は「聲立テテ」、「書付け」は「書付ケケル」、「追懸ける」は「追懸ケケル」とよませる例になつて居る。

あつぱれ・かつぱの如き半濁音符は原本には無いが、これは便宜上つける事にした。

言語の清濁も今日と異なるもの多く、安置はアンヂ、庵室はアンジツ、秘藏はヒサウ、拔羣はバックン、群集はクンジユ、安全はアンセン、談合はダンコウと讀むのである。

句點は語り物としての間隔を示すのが主であるから、讀み物としての句讀とは必ずしも一致しない場合もある。例へば、「手を合せてぞ拜みける」を「手を合、せてぞ拜みける」、「むせ返りて歎きける」を「むせ返、りて歎きける」と詞の中途に切り、「ちどり足」を「ち、ど、り足」とこ

まかく刻みて、酔歩蹢躅たるさまを表現せしめる類である。

註釋は本文に*點を附し、欄外下端に行數を示し、各段の末に一括して掲載することとした。

昭和十八年二月

藤井乙男識

近松世話物全集 中卷

目 次

一 丹波與作待夜のこむろぶし (寶永五年?)	〔一七四〕
解題	〔三〕
本文 上之卷	〔六〕
〔註釋〕	〔二三〕
本文 中之卷	〔二六〕
〔註釋〕	〔五五〕
本文 與作小まん夢路のこま	〔五九〕
〔註釋〕	〔七二〕

二 淀鯉出世瀧德（寶永五年冬？）	〔七五—四〇〕
------------------	---------

解題	〔七〕
----	-----

本文 上之卷	〔八三〕
--------	------

〔註釋〕	〔一一〕
------	------

本文 下之卷	〔二八〕
--------	------

〔註釋〕	〔三六〕
------	------

三 五十年忌歌念佛（寶永六年正月）	〔四—一九〕
-------------------	--------

解題	〔四四〕
----	------

本文 上之卷	〔四四〕
--------	------

〔註釋〕	〔五五〕
------	------

本文 中之卷	〔五七〕
--------	------

〔註釋〕	〔六八〕
------	------

本文 下之卷	〔八〇〕
--------	------

【註釋】……………【一五】

四 心中乃是氷の朔日（寶永六年？）……………【九一—二〇〇】

解題……………【二〇一】

本文 上之卷……………【二〇三】

【註釋】……………【二五】

本文 中之卷……………【三七】

【註釋】……………【四九】

本文 下之卷……………【五一】

【註釋】……………【五九】

五 今宮心中（寶永七年夏？）……………【六一—三八】

解題……………【六三】

本文 上之卷……………【六五】

【註解】……………【六〇】

本文 中之卷……………〔二六四〕

〔註釋〕……………〔三〇五〕

本文 下之卷……………〔三〇八〕

〔註釋〕……………〔三五〕

六 冥途の飛脚（正徳元年三月）……………〔三九—三六二〕

解題……………〔三二〕

本文 上之卷……………〔三七〕

〔註釋〕……………〔三四〕

本文 中之卷……………〔三四〕

〔註釋〕……………〔三六〇〕

本文 下之卷……………〔三六三〕

〔註釋〕……………〔三八〇〕

七 夕霧阿波鳴渡（正徳二年正月？）……………〔三三—四〇〇〕

解題……………〔三八五〕

本文 上之卷……………〔三九〇〕

〔註釋〕……………〔四〇六〕

本文 中之卷……………〔四〇九〕

〔註釋〕……………〔四一七〕

本文 下之卷……………〔四二六〕

〔註釋〕……………〔四三八〕

八 長町女腹切（正徳二年？）……………〔四〇一—四九六〕

解題……………〔四四三〕

本文 上之卷……………〔四四六〕

〔註釋〕……………〔四六二〕

本文 中之卷……………〔四六六〕

〔註釋〕……………〔四八三〕

本文 下之卷	〔四八七〕
--------	-------

〔註釋〕	〔四九七〕
------	-------

九 大經師普曆（正德五年正月？）	〔四九一—五〇三〕
------------------	-----------

解題	〔五〇一〕
----	-------

本文 上之卷	〔五〇七〕
--------	-------

〔註釋〕	〔五二六〕
------	-------

本文 中之卷	〔五二六〕
--------	-------

〔註釋〕	〔五四四〕
------	-------

本文 下之卷	〔五四五〕
--------	-------

〔註釋〕	〔五六一〕
------	-------

卷中插入圖版

丹波與作待夜の小屋節（八行本首葉）

五十年忌歌念佛（八行本首葉、繪入本插繪三葉）

心中乃是氷の朔日（繪入本插繪二葉）

今宮心中（八行本首葉）

冥途の飛脚（惣廓方角圖）

大經師昔曆（六行本首葉）

丹波與作待夜のこむろぶし

丹波與作待夜のこむろぶし

「與作思へば照る日も曇る關の小萬が涙雨」「與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さし」(諸國盆踊歌) から著想した作で、丹波の一城主由留木家の息女しらべの姫、漸う十歳足らずで關東の高家入間家へ養子分として興入する事となり、今や出立の間際になり、東へは行かぬとむつかりて動かず、お乳の人滋野井はじめ一同當惑の折から、行列に加はつた少年馬士三吉が携へた道中双六に興がりて、姫君の心動き機嫌直りしより、滋野井は三吉に褒美の菓子を與へ、話の内に三吉は離別の夫伊達與作との間に儲けた一子與之介なることを知り、滋野井は母ともいはれず子とも呼ばれぬ現在の苦衷を物語る。これが滋野井子別れとして人の知る歌舞伎や淨りりの原作である。先代萩の政岡も恐らく滋野井の換骨奪胎であらう。與作は主家を逐はれ落魄して馬方となり下り、關の出女小萬に馴染み、その父の困厄を救ふために、姫の一行が關の宿に泊つた夜、三吉を教唆して姫の用金を盗ませたが、三吉は忽ち捕へられ、且三吉が小萬に預けし守袋よりおのが實子たるを知るに及んで、悔恨の極、小萬と共に宿外れの千貫松で死な

うとする。それが滋野井の救護によつて無事に歸参かなひ、めでたく終る。

外題年鑑に寶永四年六月上演とあれど、本曲が心中重井筒より後の作たることは、大切の「興作踊」の文句で明かであり、又道行の文中に「契りそめしは一昨々年拔参宮の道連」とあるは、寶永二年の拔参宮を當込んだ文句と見られ、寶永五年京都の夷屋座で「ゑびす講結御神」むすぶのおんかみの外題で、顔見せ狂言に出されてゐるから、寶永五年の作たることは確實である。

丹波與作を劇に仕組んだ最初は、延寶五年十一月、京都四條北側の芝居で、元祖嵐三右衛門が丹波與作籠ぬけのやつしが大當りであつたといふ。降つて元祿三年、京村上平右衛門座で「丹波與作手綱帶」(富永平兵衛作)が演ぜられた。是等の先蹤はあるが、巢林子の本曲は嶄然として群を抜いた名作である。

正徳二年三月再興行の際には「丹波與作」と外題を替へ、享保十七年六月の興行には「伊達染手綱」と改題したが、それは道行の標題を「道行戀路の月毛馬」と變へたに過ぎない。然るに寛延四年二月上場の「戀女房染分手綱」(吉田冠子、三好松洛作)は場數をふやし筋を繁雜にしたが、本曲上巻の滋野井子別れの段を十段目にそのまゝ、借用してゐる。これが同年秋江戸の中村座に上場され、爾來今日に引續いて繰返され、恰も「女鉢の木」や「吃又」が原作よりも「北條

時頼記」や「名筆傾城鑑」によつて有名なものと同様である。

なほ歌舞伎の書替ものには、寛政五年四月大坂中座の「東海道戀關札」(辰岡萬作作)、同七年十一月京都四條南側芝居の「新改版道中双六」(奈河篤助作)、文化二年八月江戸市村座の「小室節錦江戸入」(並木五瓶作)等がある。他の淨るりには一中節の「與作小まん夢路の駒」、豊後節の「丹波與作夢路駒」、宮蘭節の「三吉うれひの段」があり、また長唄に「與作」がある。

大形八行四十五丁本に據り、八九行取交三十五丁本、十一行二十二丁本及び五十九丁本(丹波與作)を對照した。